

## 序 文\*

本書は、今から3年前の2006年に開始された「子どもの発達を支援する新しい指導法の開発」プロジェクトの成果としてまとめられた「指導書シリーズ」の3冊目である。当初から、本「IT教育」は、他の7つの教科・領域とは異なって、本プロジェクトの目標にしたがい、明確に「教育実験」を打ち出して始まった。つまり、目先の変化は期待しつつも、むしろ、中長期的な「教育改革」に寄与することを心がけ、3年間にわたり同じ単元で発達段階を変えた「IT教育における発生的なモメント」の解明を念頭に、確かに「スパイラル・アプローチ」が有効であるかどうかを検証する、科学的な手法で出発している。出発点は感覚的かつ手探りなものであったが、「目標と内容」にかかる課題を「子ども中心」の観点から考察し、分析を経て因子を抽出し、予測し仮説を立て実験をして、当初の「目的」にいつそう近づける試みである。参加者全員が経験と智慧とエネルギーを要する、それでいてワクワクする試みであった。改めて、子どもたちと地域及び学校の関係者を含め参加者全員に感謝の念を禁じ得ない。

本書には DVD が添付されている。映像の力はすごい。今の子どもはデジタルネイティブ (digital native) と呼ばれる。子どもたちの笑顔、意欲、ありあまる才能、それを導く先生方の奮闘ぶりが描かれている。

映像は常に切迫感があり、その瞬間の生き生きとした行動をあますところなく映し出している。時間を見つけては開き、学び、活用して欲しい。

本書を手にした方々が、先ず何を心にとどめ、今後いかなる行動すべきか。簡略に指摘する。

### (1) 「モンゴルらしさ」(モンゴルマイクェ)と「グローバル化思考」への挑戦

プロジェクト開始当初のモンゴル国「IT教育」は、「IT機器の活用」を推進していた他の国々とは異なり「情報科学の教育」であり、いかにも「モンゴルマイクェ」の内容であった。一方、「IT教育」は「CTとDT」(コントロール技術とデザイン技術)の習得に特化しつつある。したがって、過去3年間の内容の継続性を考慮し「プログラミング初歩」(HP作成)が本指導書の内容に加えられている。グローバル化思考つまり国際的動向を視野に入れ見据えながらも、モンゴルらしさ。これら2者の融合が、時代を牽引することになるという確信である。

また、マルチメディア化するコンピュータは、著作権の軽視あるいは無視につながりかねない道具でもある。メディア教育と情報倫理など、同じくグローバル化に対応する意思を表明する努力が、強く求められる。

### (2) プロジェクト最終年を見据える

本プロジェクト「子どもの発達を支援する新しい指導法の開発」の「子どもの発達」は、概して「学年段階あるいは校種」という幅広い段階を考えている。しかし、第三年次は、「幅広

さ」にとどまるのではなく、地域特性と地域を活性化するTVE(Technical Vocational Education、職業教育)の特徴及び地域の特色を視野に入れた「子ども一人ひとりの個性に応じた教育」あるいはATI(Aptitude Treatment Interaction、適性処遇相互作用)を取り入れ「深さ」への配慮も提案している。両者が相まって持続的な発展が可能になる。

### (3) プロジェクト終了後を見据える

過去2年間及び3年目にも蓄積された豊富で貴重な記述及び映像等資料を含む成果物が、プロジェクト終了後もいっそう活用され改善などされ継続的に利用されるよう、「プロジェクト成果管理運営及び貸借データベース」(仮称)を構築し、組織的に運営、発展させていくことが、期待されている。

本書の意図するところが「モンゴル国」に根付くか否かは、ひとえに、本書を手にしたすべての人々の持続的な意欲と情報の共有に依存していることは論を待たない。

本書は、「IT教育」の新たな試みを余すところ無く記している。いわば「部分最適」である。ここで得られた世界潮流の「ユーザー・エクスペリエンス」(user-experiences, UX)に依拠した成果を「モンゴル国全体」そして「世界に向け」波及させていく、つまり「全体最適」の、いっそうの努力と期待が、求められているのである。

覚悟を決めることである。

2009年(平成21年)4月

モンゴル国「IT教育」プロジェクトアドバイザー  
東京学芸大学  
教授 篠原文陽児

\*) 本稿は、第3年次指導書の「序文」をやや加筆・修正したものである。

(平成21年5月4日篠原記)